

## 第三者意見



株式会社レスポンスアビリティ  
代表取締役  
足立直樹氏

「鹿島 CSR 報告書 2008 年版」は、総合建設企業としての鹿島建設が自らの事業内容と、それを踏まえた上でどのように社会的責任を果たしているかを多面的に示したものになっています。建設業という私たちはその成果物である建造物だけを考えがちですが、この報告書は出来上がったモノだけではなく、それを使う方や作る方のことを見据え、また、それが立地する環境についても目を向けた厚みのある内容になっています。

本報告書で示された内容で特に評価したいのは、まず上記のような視点が一貫してあることです。全体の構成を4章に分け、事業が提供する価値、働き手への配慮、環境への配慮、地域社会との関わりについて丁寧に説明しています。このことで、何をしているかだけではなく、何のためにしているかが、よく伝わってくる報告書になっています。特に各章の扉にある担当部長の言葉は、鹿島の考え方を理解する上で役に立ちます。

そして全体を通して強く感じたのは、多くの技術を開発し、環境問題に対して積極的に貢献していこうとする鹿島の姿勢です。例えば、日本社ビルの解体で採用された新しい解体技術によって廃棄物のリサイクル率が99.4%にも出来たことや、指標生物を利用して都市開発における環境改善効果を定量的に計測できるようになったことなどは印象的でした。建設業は技術的に既に成熟した産業のように考えていましたが、新築工事はもちろん解体工事でも様々な新技術が導入されていることは心強く感じました。

その一方で、地球環境問題をはじめとする私たちが直面する多くの課題は、ハード面の技術だけでは解決できないことも事実です。これに対して、本報告書でも、都市の価値を高めることの必要性やソフト面の技術での対応が述べ

られています。今後さらに考えていただきたいのは、建造物の注文者、すなわち施主や社会をどう巻き込むかということです。建設業の方はよく「施主様の考え次第」とおっしゃいます。たしかにその事情は理解できますが、本当に問題を解決するためには、優れた環境技術を採用した建造物を、長期間にわたって大切に使用してもらうことが必要です。良いモノを作ることだけではなく、作ったモノを長く使ってもらうこと、そこまでを自分たちの仕事として考え、その部分により力を入れていただきたいと思います。

もちろんソフト面でも、いくつもの良い取り組みをなさっていることも、報告から読み取れました。建設現場で、協力会社も含めて質の高いコミュニケーションを行うことに力を入れていることは素晴らしい事例だと思います。特に安全と環境に関しては徹底的な教育指導を行い、働く人を大切に育てている様子がよく伝わってきました。

また、生物多様性は企業活動と人間社会の存続のために重要ですが、このことに真剣に取り組んでいる企業はまだ極めて少数です。その中で鹿島が生態系保全行動指針を作るなどして本業の中で取り組んでいることは、先進性の現れと言えるでしょう。

最後に来年度以降に向け、具体的な課題を一つ申し上げたいと思います。本報告書では低炭素社会についても触れられています。2050年に世界全体でCO<sub>2</sub>の排出量を半減することは単なるスローガンではなく、もはや現実の目標です。「100年をつくる会社」である鹿島がこの課題をどう捉え、どのような解決策を提案するのか。2050年にどのような鹿島となり、そのために今からどのような変革を重ねていくのか。来年度の報告書では、これらのことについてぜひ具体的な考えを示していただきたいと思います。